

社会に寄与する理系思考

田端 道彦(機械工学科)



『武器としての理系思考/武田邦彦 著/ビジネス社 2021』

中国の武漢で発生した新型コロナウイルスにより、この1年、皆さんも生活に影響を受けていると思います。ほとんどのマスメディアは、社会にその恐怖をあおっているだけの報道しかしていません。ほとんどは論理的な思考のもとにその対応策を示すことができないのが現状です。安全はリスク管理であり、100%安全なことは世の中には存在しません。データベースでものを考える理系の思考としては常識的な考え方だと思いますが、多くは非科学的な感情論があふれているように思われます。

最近話題に上っている環境問題もその1つです。1988年頃より、CO₂の増加により、地球の温暖化が進むと言われ始め、IPCC(国連気候変動に関する政府間パネル、Intergovernmental Panel on Climate Change)によりCO₂の抑制が進められました。現在も脱炭素社会が叫ばれているのが現状です。あれから30年以上経ち、明らかにCO₂の排出量は増加したにも関わらず、実際には地球の平均気温の上昇は当時の予想よりもかなり低いことが明らかになっています。もう一方で、1973年のオイルショックの頃、石油は30年で枯渇すると言われ、2000年前にピークアウトすると叫ばれていました。しかしながら、2000年前後からシェールオイルの採掘が始まり、2009年にはその生産により、今では1000年程はもつと考えられています。いずれの事象も、明らかに将来予測を誤っていたことは明らかです。これは、現状で分からないものを安易に予測などできないということを示しています。にもかかわらず、現在でも同じ論理展開によりCO₂の排出削減のため、脱炭素社会化が進められています。

私は30年前当時、内燃機関を用いた代替エネルギーや自然エネルギーの活用、電動化など、多くのアプローチを検討した経験がありますが、いずれも化石エネルギーのそのエネルギー密度の高さとコストを考えた場合、化石エネルギーに太刀打ちできないとの結論に至りました。今でも同じような議論が繰り返されています。社会の繁栄を支えるためには、できるだけ技術を発展させ、省エネルギー化(効率改善)し、化石燃料を活用し続けることがベストであると考えています。技術は必ず発展するものであり、技術発展は必ず社会の幸福に寄与します。

現代社会では、マスメディアやインターネット上で膨大な情報が氾濫しています。理系的論理思考を基に、巷に氾濫するいろいろな多量情報を自ら整理し、自分で考え行動することが必要であることを考えさせられました。本書にも引用されていますが、ドイツの哲学者であるヘーゲルの、「法の哲学」序文の記述に、「ミネルバのフクロウは夕暮れに飛翔する」という言葉があります。これは、哲学者は預言者ではないと戒めたものです。科学者、技術者も同じです。社会に氾濫する多量情報から正しいデータ(情報)を整理し、解析してことを進め、より良い将来に対して社会貢献していきたいものです。